

## 問題

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

(50点)

チェック

- 1 今(いま)は昔(むかし)、ある長受領(おとぎ)の家に、祇園(ぎえん)の別当(べつたう)に戒秀(かいしゅう)といひける定額(ぢやうがく)、忍びて通ひけり。守(まも)り、この事をほの知りたりけれども、知らず顔(かほ)にて過ぐしける程(ほど)に、守出(まも)でたりける間に、戒秀(かいしゅう)入り替りて入り居て、したり顔(かほ)にふるまひける程(ほど)に、守返(まも)り来たりけるに、怪(あや)しく主(ぬし)も女房(にようぼう)どももすずるひたる気色(きしき)見えければ、守(まも)り「思ふに、アさ(あさ)にこそはあらめ」と思ひて、奥(おく)の方(かた)に入りて見れば、唐櫃(からびつ)の有るに、例(れい)ならず鎖(しやう)差(さ)したり。「定めて、これに入れて鎖(しやう)を差したるなめり」と心得(こころ)得て、長(なが)しき侍(さむらい)一人(ひとり)を呼びて、夫(おとこ)二人(ふたり)を召(め)させて、「この唐櫃(からびつ)、只今(ただいま)祇園(ぎえん)に持(も)ち参りて誦経(ずきやう)にして来たれ」といひて、立文(たてぶみ)を持たせて唐櫃(からびつ)を掻(か)き出して侍(さむらい)に取(と)らせつれば、侍(さむらい)、夫(おとこ)、に、差(さ)し担(たん)はせて出(で)でて行きぬ。しかれば主(ぬし)の女(によう)も女房(にようぼう)どもも、あさましき気色(きしき)はあれども、でもの言はず。
- 5 しかる間(ま)、侍(さむらい)この唐櫃(からびつ)を祇園(ぎえん)に持(も)ち参りたれば、僧(そう)どもも出(で)来て、これはやむことなき財(たから)なめり、と思ひて、「別当(べつたう)にとく申(ま)せ。イかねてはえ開(ひら)けし」と言(い)ひつつ、別当(べつたう)に案内(あんない)を言(い)はせに遣(や)りて待つに、やや久(ひさ)しく「え尋(たず)ね会(あ)ひ奉(ほう)らず」とて、使返(つかへ)り来ぬ。しかる間(ま)、誦経(ずきやう)の使(つか)の侍(さむらい)は、「長(なが)々とえ待ち候(ま)はじ。ウ己(うぢ)が見候(ま)へばいぶかしかるまじ。かつ只開(ひら)け給(たま)へ。忙(いそ)しく侍(さむらい)るぞ」と言(い)へば、僧(そう)ども「いかがあるべき」と言(い)ひあつかふに、唐櫃(からびつ)の中に細(こま)くわびしげなる音(ね)を以(も)て、「只所(ただしよ)司開(し)きにせよ」と言(い)ふ音(ね)あり。僧(そう)どもも誦経(ずきやう)の使(つか)の侍(さむらい)もこれを聞(き)きて、あさましく思(おも)ひ合(あ)へること限りなし。然(しか)れども、さてあるべきことならねば、恐(おそ)づ恐(おそ)づ唐櫃(からびつ)を開(ひら)けつ。見(み)れば、別当(べつたう)唐櫃(からびつ)より頭(かぶ)を指(さ)し出(で)たり。僧(そう)どももこれを見て目口(めくち)て皆立(みな)ち去(い)りにけり。誦経(ずきやう)の使(つか)も逃(に)げて返(かへ)りけり。しかる間(ま)、別当(べつたう)は唐櫃(からびつ)より出(で)て走り隠(かく)れにけり。これを思(おも)ふに、守(まも)り「戒秀(かいしゅう)を引き出(で)して、踏(ふ)み蹴(く)るも聞き耳(みみ)見(み)苦しかりなむ。只恥(ち)を見せむ」と思(おも)ひける、いと賢(さ)き事(こと)なりかし。戒秀(かいしゅう)もとより極(たぎ)めたる物言(ものごと)ひにてありければ、唐櫃(からびつ)のうちにてかくいふなりけり。

(一) 指示語の指示内容を押さえる

(二) 多義語を文脈に沿って訳す

(三) 解答要素を意識し、それぞれに適切な字数を割く

世にこの事聞こえて、オをかしくしたりとぞ讚めけるとなむ語り伝へたとや。

〔『今昔物語集』〕

〔注〕○長受領——年配で経験豊かな受領（＝諸国の長官）。

○祇園——延暦寺の別院、祇園社。

○別当——寺務を司る僧。

○定額——官（政府）によって一定数置かれた僧。定額僧。

○すずろひたる——慌てている。

○夫——人夫。

○誦経——誦経してもらったためのお布施。

○立文——正式の書状。

○    て——『今昔物語集』特有の意識的欠字。ℓ7は「あきれ」が想定される。ℓ14の欠字は「はだかり」（＝

いっばいに開け）かという。

○あつかふ——処置に苦しむ。

○所司——別当を補佐する僧。

○聞き耳——外聞。

設問 (一) 傍線部イ・ウ・エを現代語訳せよ。

(24点)

(二) 「さこそはあらめ」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

(10点)

(一) 目的語、指示内容など文脈から適切な語を補う

(三) 「をかしくしたり」(傍線部オ)とあるが、何がなぜ「をかし」なのか、わかりやすく説明せよ。

(16点) ……

**出典**

『今昔物語集』巻二十八「祇園の別当戒秀、誦経に行はるる語第十」

『今昔物語集』は十二世紀成立とされる説話集。全三十一巻からなる(ただし、八・十八・二十一の三巻は欠巻)。天竺(てんたく)・震旦(しんたん) (中国)・本朝(日本)の三国の千余話を、仏法部・世俗部に分けて収載した古代説話の集大成である。

**解答**

- (一)イ別当の到着前に唐櫃を開けることはできない  
ウ私が見ておりますから、唐櫃の中身について心配はありますまい  
エ皆驚き、呆然とし合ったことはこのうえもない
- (二)妻と密通している男がいま家の中にいるはずだ、ということ。
- (三)守の報復が、自分の面目をつぶさず戒秀に恥をかかせる賢明なものだったから。

**解説**

今回の目標は話の展開を押さえ、人物の言動を正しく読み解くこと。そのうえで、一話の焦点がどこにあるのかを見定め、それに対する語りの批評を的確にとらえることが求められる問題だ。

**今回の文章の概要**

**1 受領宅での密通発覚(第一段落)**

- 守(Ⅱある長受領)は戒秀が自分の妻と密通していることに気づきつつも、素知らぬふりをしていた。
- ←
- ある日、守の外出中に戒秀がやってきて、得意顔で振る舞っていた。
- ←
- 帰ってきた守は妻と女房たちが慌てているのを怪しみ、「さては、戒秀が来ているのだろう」と思う。(↓(二))
- ←
- 怪しい唐櫃を見つけ、「この中に入っているのだろう」と悟る。
- ←
- 守は侍に、その唐櫃を誦経の布施として祇園社に持っていくよう命じる。
- ↓
- 妻と女房たちは驚いた様子だが、何も言わない。

## 2 祇園社での顛末（第二段落）

○僧たちは唐櫃を素晴らしい財宝だろうと思い、開けるために責任者である別当（＝戒秀）を探しに行かせる。

○戒秀は唐櫃の中にいるため見つからず、待ちくたびれた侍が「自分が見ているから」と言つて開くことを催促する。

○僧たちが処置に困る中、唐櫃の中から「別当補佐の決裁で開けなさい」という声がある。

○皆驚いたが、そのままにしてはおけないので恐る恐る開けてみた。

○出てきた戒秀に皆驚いて逃げ去り、戒秀自身も走って隠れてしまった。

## 3 筆者による総括（第三・第四段落）

○守に対して

外聞に配慮して、暴力に訴えるのではなく、恥をかかせることで戒秀に報復したのはとても賢明なことである。世間の人もこの件を高く評価している。（↓三）

○戒秀に対して

もともと大変口達者なので、唐櫃の中でも（別当として何事もなく指示を出すかのような）面白いことを言えたのだ。

## ■コラム「僧侶の破戒」

中国にも今回の問題文と類似の話がある。戒律を守るべき僧侶の失敗談は、古今東西人々の関心を集めやすかったのである。仏教に携わる者の破戒という深刻な内容であるが、この問題文は滑稽譚こっけいたんとなっていて、守の冷静な処置によって窮地に追い込まれた僧がせっぱ詰まって吐く軽妙な一言で「オチ」となる。一方、二〇一〇年度の東大入試第二問で出題された『古今著聞集』の文章のように、母のために不殺生戒を破った僧侶が孝行息子として賞賛される、という話も存在する。

☑ 多義語を文脈に沿って訳せたか

☑ 目的語、指示内容など文脈から適切な語を補えたか

（一）戒秀は冒頭に「定額」（注）参照とあるように、政府から下された偉い僧で、祇園社の別当、すなわち最高責任者であった。守から立派な布施（中身は戒秀）の寄進を受けた祇園社の僧たちは「別当にとく申せ」と、まず責任者である別当にその旨を伝えようとする。

傍線部の「かねて」とは、「前もって」の意。文脈を踏まえると、「**別当の到着前に**」という訳になる。「じ」は打消の意志。「え……打消」は不可能を表して、「**開けることはできません**」という意志が強く表されている。設問文で特に指示されていないが、これだけでは解答欄が余るため、「唐櫃を」など、「何を」開けることができないのかを補って訳出すること。

ウ布施を受け取るため、僧侶たちは戒秀を探しに行く。しかし、当

然ること、いくら探しても見つからない。守の使いは、しびれを切らして「もう待てない」と言い、この傍線部に至る。

傍線部の「ば」が〈…〉なので、から〉という意の確定条件であることを押さえたうえで、「いぶかし」が何に對し、どのような意味を表すかを考えよう。この言葉は、〈明らかにしたい〉の意も表すが、その後の「まじ」と合わせて考えると、ここは〈気がかりである・不審である〉の意が適切だ。イ同様、「唐櫃の前身」「唐櫃を開けること」など、「いぶかし」の対象を明示して訳出しよう。

猥納品の受け取りに際して、なぜ責任者の立ち会いが必要かということ、数のごまかしによる横領の可能性があるためだ。僧たちは疑われることを恐れて、戒秀が来るのを待っている。それに対して使いは、自分がちゃんと見ているのだから唐櫃をこのまま開けても大丈夫だと保証するのである。

エ「あさまし」は〈不快・嫌悪の思い〉を表すことが多い。ただし、原義は〈意外なことに出会った時の驚き〉である。もともと善悪の感情を表す意味はなかったが、時代とともに〈期待外れの不快〉を表すことが多くなり、現代語のマイナス評価に至る。

さて、ここはどのような意味か。戒秀の立場を考えれば、その行為は言語道断としか言いようがないが、この場面においては、声の主が特定されていない。「あさまし」と思った人々の関心は、思いも寄らぬ言葉自体にある。「恐ぶ恐ぶ唐櫃を開け」て、初めて「唐櫃より頭を指し出」した戒秀を知ったのだ。こうした状況を考えれば、ここは原義どおり〈驚き、あぎれる〉の意味。模範解答では「し合へる」の意味を明確にするため、冒頭に「皆」と補っている。

☑ 指示語の指示内容を押さえられたか

(二)傍線部は「さならむ」を「こそ」と「は」で強調した表現。断定の助動詞の「なり」はもともと「に＋あり」が縮まった表現なので、「こそ」で強調すると、「にこそあれ」となるのを覚えておこう。「さ」は指示語「然」で、〈そのように〉。

「今回の文章の概要」で確認したように、傍線部までの記述は、戒秀という僧が守の家に「忍びて通」っており、守は「ほの知り」ながら素知らぬふりを通してしていると、守の留守中に戒秀が家に入り込み、守が帰ると「主も女房どもも」慌てている、という内容。「忍びて通」うとは、〈戒秀が守の妻と密かに通じている〉こと。文中の「主」がわかりにくいのが、唐櫃が担ぎ出される場面、「主の女も女房どもも」(ℓ6)とあることからわかるように、これは女主おんなあかのことで、守の妻である。「女房」は〈侍女〉。よって、〈妻の密通相手の戒秀が来ている〉という趣旨でまとめればよい。

☑ 解答要素を意識し、それぞれに適切な字数を割けたか

(三)設問文に「何が」とあるので、まずは解答の主語から考えていこう。傍線部の直前の一文を読むと、「をかし」は戒秀の言動についての言葉かと思われる。しかし、「をかしくしたり」とある通り、ここは何かの処置についての判断であり、しかも世間に知られて、人々がそれを「讚め」たというのだから、戒秀の言動を指すとは考えられない。とすれば、指すのはもちろん守の報復だ。

最初から密通に気づいていながら、面と向かって戒秀をとがめない

守は、一見行動力のない気弱な人物とも見える。しかし、「戒秀を引き出だして、踏み蹴るも聞き耳見苦しかりなむ。只恥を見せむ」(15)とあるように、守は憤りながらも、世間体を考え、**自分の評判を落とさない方法で戒秀に恥をかかせて報復しようとしたのである**。それを語り手は「**賢き事**」と絶賛している。よって、ここでの「**をか**」は「素晴らしい」といったプラスの評価であるとわかる。

「長受領」らしい冷静さが犯人を窮地に追い込み、その罪を部下に広く知らせることで断罪した。さらに、その処置によって自分の、密通された間拔けな男としての汚名を免れているのである。それは確かに賢明な対応に違いない。

### 東大の求めるレベル

(一)の現代語訳は基本的な古語ばかりで、文脈を踏まえた語句補充もそれほど難しくないため、満点を狙いたい。逆に言えば、ここで半分以上失点した場合、他の受験生と差がついてしまう。

(三)は解答を枠内にまとめるのに苦労する問題。模範解答は①〈守の報復が〉、②〈自分の面目をつぶさず〉、③〈戒秀に恥をかかせる〉、④〈賢明なものだった〉という四要素に分けられるが、「①戒秀を唐櫃の中に入れて送り返すという守の行動が④賢明だったから」というように一要素に字数を割きすぎると、別の要素を盛り込めなくなってしまう。すべて盛り込むのは難しいが、①と③は確実に押さえる必要がある。

### 全訳

今ではもう昔の話だが、ある年配の受領の家に、祇園社の別当で戒秀という定額僧が、忍んで通っていた。守(＝受領)は、このことをうすうす知っていたけれども、素知らぬふりをして過ごしていたうちに、守が外出していた間に、戒秀が入れ替わりに入り込んで、得意顔で振る舞っていたときに、守が帰ってきたところ、奇妙にも女主人も侍女たちも慌てている様子に見えたので、守は「さては、**アあの男が来ているのだな**」と思って、奥(の部屋)のほうに入って見てみると、唐櫃があつて、普段と異なつて鍵を掛けている。「きつと、この中に(男を)入れて鍵を掛けているのだらう」と悟つて、年長の侍を一人呼んで、人夫を二人連れてこさせ、「この唐櫃を、今すぐ祇園社に持つて参つて誦経の布施にしてください」と言い、正式の書状を持たせて唐櫃を運び出して侍に預けたので、侍は、人夫に担がせて出て行つた。すると、女主人も侍女たちも、驚いた様子であるが、(呆然として)何も言わない。

そうする間に、侍はこの唐櫃を祇園社に持つて参つたところ、僧たちが出てきて、これは素晴らしい財宝だらう、と思つて、「別当に早く申し上げよ。イ別当の到着前に(唐櫃を)開けることはできません」と言いながら、別当に事情を報告させに(使いを)やつて待つと、ずいぶん時間が経つて「探してもお目にかかることができません」と言つて、使いが帰ってきた。それで、誦経の使いの侍は、「長々とお待ちすることはできません。ウ私が見ておりますから、(唐櫃の自身について)心配はありませんまい。ただ今すぐにお開けください。(私

は)忙しいのですよ」と言うので、僧たちは「(それにしても)どうしたものか」とあれこれ取り沙汰していると、唐櫃の中で、小さく情けない声で、「ただ所司の決裁で開けることにしなさい」という声がある。僧たちも誦經の使いの侍もこれを聞いて、エ驚き呆然とし合ったことはこのうえもない。しかし、そのままにしてよいことではないので、恐る恐る唐櫃を開けた。見ると、別当が唐櫃から頭を差し出している。僧たちはこれを見て、目や口(をあげっぱなしにしたまま)皆立ち去ってしまった。誦經の使いも逃げて帰ってしまった。その間に、別当は唐櫃から出て走り隠れてしまった。

これを思うに、守が「戒秀を(唐櫃から)引き出して、踏んだり蹴ったりするのも外聞が悪かろう。ただ恥をかかせてやろう」と思ったのは、たいへん賢明なことであるよ。戒秀はもともと大変口達者な男であつたので、唐櫃の中でもあのような(面白い)ことを口にしたのだなあ。

世間にこの話が知れ渡って、(守は)オ上手に処理したものだと(人々が)褒めたと言っているということだ。

まとめ

- ・多義語を文脈に沿って訳す
- ・目的語、指示内容など文脈から適切な語を補う
- ・指示語の指示内容を押さえる
- ・解答要素を意識し、それぞれに適切な字数を割く